

第二章 日清戦争以前

第一節 明治以前

海国日本民族は古来海上に活躍した事蹟に乏しくない。神功皇后の三韓征伐、足利時代倭寇の活動、進貢船の往来、徳川時代御朱印船の遠征、慶長年間に於ける墨西基航路の創設など比々として然りである。然るに寛永十三年（西暦千六百三十六年）の鎖国令に依つて海外に於ける活躍は中断せられ、嘉永六年（西暦千八百五十二年）ペリー来航迄殆ど二百有余年間空しく國內に雄伏の已むなきに至つたが、一度其の情眼より醒むるや直ちに我が民族は固有の本領を發揮し再び雄々しく世界海運界に躍進したのである。

第二節 明治初期

維新後明治政府は其の開国進取の大方針の元に海運の振興に意を注いだ。明治二年政府は十数隻の汽船を集めて回漕会社を創設し東京大

阪間の定期航路を開いたが、翌三年には僅かに汽船三十五隻約一万五千五百屯を保有するに過ぎなかつた。明治四年大阪に三菱会社が創立せられ汽船業を開始したが、其の経営宜しきを得政府も亦之に郵便物の郵送を命じて保護を加えたから、漸次発達の緒に着いた。偶々明治七年佐賀の乱起り次で台湾征伐の事あり、政府は軍隊軍需品輸送の爲十数隻の汽船を購入して之を三菱に託した。三菱は役後此等の船舶を利用し一層内國航路の拡張を行い、明治八年に新に上海航路を開き東京丸、高砂丸、新潟丸、金川丸等を之に配した。之れ我が國外國航路の嚆矢である。加之政府は此の年日本國郵便蒸氣船会社（上記回漕会社の変身せるもの）を解散し其の持船を三菱の経営に入れ、其の後年々二十五万円の補助金を支給し内外郵便航路の経営に当らしめた。

明治十年西南の役が起ると政府は資金を三菱に貸与して新たに十隻の汽船を購入して軍需輸送の急に應ぜしめた。其の翌明治十一年には我が國の船舶保有量は百九十五隻四万四千噸に増加した。其の後政府は三菱の強專増長を抑えるため明治十五年共同運輸会社を設立せし

めて三菱と対抗させたが、明治十八年此の両会社を合併して今日の日
本郵船会社を設立せしめたのである。

日本郵船は新然他会社を凌ぎ、殊に創立後十五ヶ年間毎年八十八万
円の補助金を受け内外重要航路の実権を掌握し、明治二十六年には我
が紡績業の発達に伴い棉花を輸入するため新たに孟買航路を開き海外
航路上更に一步を進めた。此の年末期に於ける我が國保有船舶は六百
八十隻十一万二百五屯であつた。